

白川静のことば
《29》



金子都美絵・画

ト辞によると、殷代の王は、氏族の長であるとともに巫祝の長であった。氏族集団が一の政治集団としての性格をもつ以前には、王の本質は巫祝の長たるにあつた。これはギリシャでも近東でも最も古い時代の王の性格に見られるところである。中国の伝統的觀念に従えば、王は天地陰陽を變理する自然的秩序の整序者たることを本質としている。王が意欲的に政治行政上にその董督権を駆使するのは、王の本来の任務ではなかつた。

〔中略〕天神合一、神人の調和に責任をもつのが王の本務であつた。王の本質は巫祝の長たるにあつた。

もし自然の節理が狂つたときは、王はその責任をとらねばならなかつた。燿という字の初形は、巫祝が祝詞を捧げたまま焼き殺される形である。王と巫祝との職掌が分化してからは、早のときには巫祝が焚かれた。『左伝』にも巫尪の焚かれる話が出ている。しかし王が巫祝であつた時代には、王が焚かれたのである。王はつねに潔斎して神に事えた。氏族の幸福は、神に事える王が神意にかなうかどうかにかかつていた。王は氏族から隔離され、神意にたがうときは追放され、焚かれ、あるいは殺された。氏族の犠牲として殺される王、それが古代の王の真の姿である。王になることは、犠牲の祭壇に上がることであつた。

『桂東雜記 拾遺』 平凡社 P222～223)

